

群 教 セ	E03 - 03
	平14.206集

互いのよさを生かして高め合える 学級づくり

- 一人一人の思いを大切にした、
合唱コンクールへの取組を通して -

特別研修員 堀口 亘

《研究の概要》

本研究は、中学校1年生を対象に、合唱コンクールという学校行事に道徳と学級活動を連携させ、学級集団に対する一人一人の意識を高める指導について実践的に研究したものである。具体的には、合唱コンクールに対する事前アンケートを基にして、集団の一員としての意識を持ち、学級目標から自分たちの役割をイメージし、よりよい合唱に向けて努力することを通し、一つの目標に対して協力して高め合えたことに気づく活動を行った。

【キーワード：学級経営 中学校 学校行事 合唱コンクール 道徳 学級活動】

主題設定の理由

一人一人の顔が違うように、一人一人の考え方は違う。あることについて、自分ではAであることが当然だと思っても、別の人はBが当然だと思っており、また別の人はCが当たり前だと思っている。この3人が共に過ごせば、考え方は3倍に広がり、その中で自分自身がよりよいと思ったものを選び出すことができる。それによって考え方の幅が広がり、自分が果たすべき役割が明確になって、人は成長することができる。これが学級のあるべき姿であると私は考えている。

しかし、改めて振り返ると、学級をこうした姿に近づけることがなかなかできなかった。本学級の生徒（中学1年 男子17名・女子17名）は、明るく、活発で、休み時間などはにぎやかである。年度当初のエンカウンター活動を通して、友達の輪も広がりを見せており、人間関係のトラブルも少ない。様々な活動に対しても、まじめに取り組むことができる。ただ、やはり、話合いの場面では、活発な生徒が主導権を握っており、一人一人が自分の考えを出すまでに至らない。また、「学級のために自分はこれで頑張ろう」という意識が薄く、与えられたものはやるが、自分たちからはあまりやろうとはしない。

こうした実態を自分の目指す姿に近づけていくためには、一人一人の思いを大切に、集団の中での各自の役割を明確にして、自分のよさ、相手のよさに気づきながら集団を高め合う学級づくりが必要である。そこで、文化発表会のメインである合唱コンクールを活用し、学級としてのまとまり、高まりをつくろうと考えた。合唱コンクールは、各自のパートに責任を持って歌い、学級一人一人の声で、豊かな響きの世界を作っていくことができる特質を持っている。より質の高いものを目指して高めていくことも可能である。

あわせて、個々の意識を学級全体に広げながら、生徒の活動と道徳、学級活動とを連携させ、一人一人の集団に対する意識を高め、日々の活動へとつなげたいと考えた。

このように、合唱コンクールを一つの契機として、お互いのよさを学び合い、その協力して活動していく活動を体感させ、その時の行動と意識を振り返らせていけば、様々な場で、互いのよさを生かして高め合う学級をつくることのできるものと考え、本主題を設定した。

研究のねらい

道徳（４ - １：役割と責任の自覚）において集団に対する意識を持たせ、学級活動（Ａ - １：学級生活の充実と向上）などでの合唱コンクールへの取組の中で、学級の協力の大切さに気づかせながら集団に対する意識を高めていくことによって、互いのよさを生かして高め合える学級をつくることができるであろう。

研究の見通し

１ 道徳「合唱コンクール」において、合唱コンクールに対する事前アンケート結果を利用し、指揮者の心情を考え、学級目標から合唱コンクールにおける自分たちの姿をイメージすることによって、集団における自分の役割を果たそうとする意欲を高めることができるであろう。

２ 朝の会、帰りの会を中心とした合唱コンクールへの取組において、週ごとの目当てを明確にしたり、指揮者、パートリーダーによる毎日の評価を学級全体に返して次の練習に役立てたり、他学年との相互発表を行ったりすることによって、よりよい合唱を目指して努力することができるであろう。

３ 学級活動「合唱コンクールを終えて」において、どんな合唱コンクールだったかを振り返り、自分たちの取組と、その際の意識とに視点を当て、その共通点をキーワードで整理した上で合唱コンクールで学んだことを考えることによって、互いのよさを生かして学級が一つになって高め合えたことに気づくことができるであろう。

研究の内容

１ 基本的な考え

（１） 互いのよさを生かして高め合える学級とは

数多くの生徒が共に学ぶ学級では、様々な意見に触れることができ、その中からよりよいものを選択していくことができる。そこには、学び合いが生まれる。自分にはない相手のよさに学ぶことで、自己を高めることができる。さらには、お互いのよさを生かし、それぞれが自分の役割を果たすことで、全員の力でよりよいものを目指す、集団として成長できる学級像を描くことができる。様々な声を集めて一つの豊かな響きを作り上げていくクラス合唱は、そうした姿を身をもって実感できる行事であると考え。この活動の中で、各自が自分の役割を自覚し（個の認識）、その役割を果たしながらよりよい合唱を目指して努力し（個と個のつながり）、学級が一つとなって高め合えた（集団としてのまとまり）ことに気づく、という段階を踏んで、目指す学級像に迫りたいと考える。

また、互いのよさを生かして高め合う場を以下のように設定する。

学級一人一人の思いを示す

一人一人の思いに触れることで自分が気づかなかったことに気づき（よさの発見）、自分の思いを広げ、時には選択して（よさの生かし）、新たな自分の思いを持つことができる（よさの創造）。

指揮者、パートリーダーを中核に据える

指揮者、パートリーダーの指示を通して自分たちの課題に気づき（よさの発見）、その課題を克服するために指示に協力して練習し（よさの生かし）、練習や発表を通して課題を達成し

て(よさの創造)、次の新たな課題に気づいていくことができる(よさの発見)。

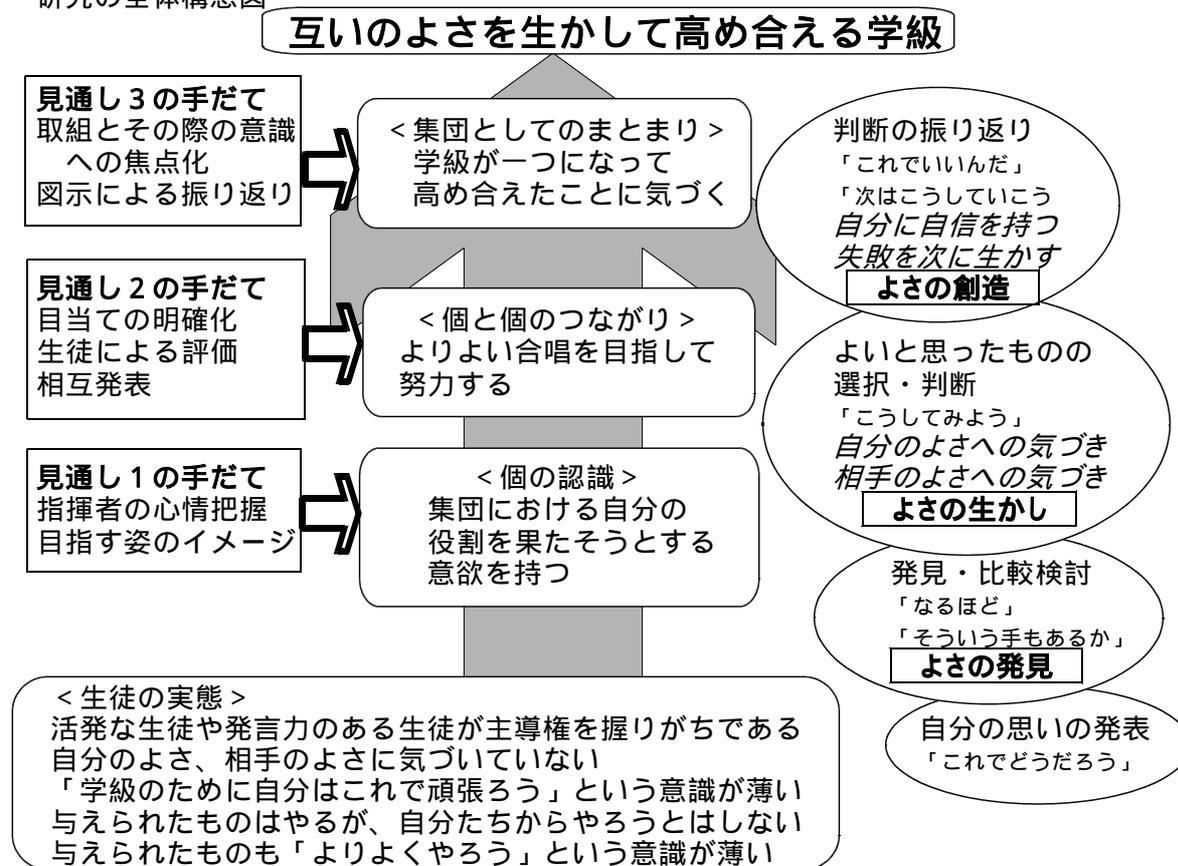
上手な人に学ぶ

仲間のきれいな響きの声や、正しい音程で歌えることに気づき(よさの発見)、口の開け方をまねたり、音程や歌い方をその人に合わせていくことで(よさの生かし)、みんなの声をそろえていくことができる(よさの創造)。

他学級、他学年の合唱を聞く

他学級や他学年の合唱に触れることで、自分たちの合唱のよさに気づき(よさの発見)、そこに自信を持ってよりよいものを目指すことができる(よさの生かし、よさの創造)。あわせて、他学級・他学年の合唱のよさに気づき(よさの発見)、それを身近な目標として練習して(よさの生かし)、よりよい合唱を目指すことができる(よさの創造)。

研究の全体構想図



2 実践の概要及び結果と考察

考察は、主に学級全体の活動の様子、アンケート、ワークシート、合唱の評価表、生活ノートの記述を中心に行う。

(1) 集団における自分の役割を果たそうとする意欲を高めることができたか(見通し1)

ア 実践の概要

資料1は、「どんな合唱コンクールにしたいか」という事前のアンケート結果である。道徳「合唱コンクール」では、この一人一人の思いを基に、「こんな合唱コンクールにするためにはどうしたらいいか」を課題として資

資料1

どんな合唱コンクールにしたいか
楽しい(10名)
協力する 悔いのない(6名)
大きい声で歌う(5名)
思い出に残る 精一杯歌う
きれいなハーモニー(3名)
心のもった 感動させる
今までで最高の(2名)

料「合唱コンクール」(東京書籍)を読み、指揮者の立場とその心情について考えた。最後に、学級目標から合唱コンクールにおける自分たちの姿をイメージして発表し合い、自分ができることに挙手をした。

イ 結果と考察

資料2は、発問「準優勝なのに、芳賀君(指揮者)が満足感でいっぱいだったのはなぜだろう」に対するワークシートに書かれた生徒の反応である。34名中25名、4分の3近くの生徒が「みんな」という言葉を使って答えている。指揮者の「みんなで頑張って優勝したい」という願い、目標で学級が一つになって頑張ってきたことが指揮者の満足感につながっていることに気づくことができたといえる。また、ここで着目すべき反応は、「一人一人が自分のできるところまで頑張れたから」である。この反応によって、みんなが一つになるということとは、集団における自分の役割を果たすことだ、と生徒たちは気づくことができたのである。

資料2 「満足感でいっぱい」の理由

みんなが協力できたから(17名)
みんなで一生懸命に歌えたから(4名)
みんなが一つにまとまったから(3名)
一人一人が自分のできるところまで頑張れたから(1名)

資料3は、生徒たちが学級目標からイメージした、合唱コンクールにおける自分たちの目指す姿である。生徒自身の言葉なので、分かりやすく具体的なものができた。こうした目指す姿が考え出せたことと、この中から、自分ができることを選び、挙手できたことで、集団における自分の役割を、具体的な取組の形で知ることができたといえる。

資料3 学級目標からのイメージ

学級目標	自分たちの目指す姿
あいさつ・返事は大きな声で元気よく!	大きな声ではっきりと歌う 姿勢や行動をしっかりとする 大きな口を開けて歌う 先生に何か言われたら大きい声で返事をする 自分から声を出す
差別や仲間外れはしない! 困っていたら助ける!	音程を取れる人がそばで一緒に歌う ここはもっとこうした方がいいとか言う
授業に集中!	合唱(練習、本番)に集中 歌っているときは歌だけに集中する アドバイスをよく聞く (指揮者、パートリーダー、先生)
なにごともし一生懸命に!	一生懸命に歌う やらなくてはいけないこと、できることを一生懸命にする (姿勢、態度、大きな口、歌詞、音程)

このことから、合唱コンクールという場で

集団における自分の役割を果たそうとする意欲が高まったと考える。

(2)よりよい合唱を目指して努力することができたか(見通し2)

ア 実践の概要

帰りの会を中心とした合唱コンクールへの取組において、週ごとの目当てを明確にした。(1週目:大きな声を出す 2週目:音程をそろえていく 3週目:強弱の歌い方をそろえていく 4週目:歌詞の意味を考えながら歌う)そして、音楽担当の教諭とも連携を図り、指揮者、パートリーダーによる毎日の評価表を活用した(資料4)。評価表に書いた自分たちのコメントや音楽担当教諭、担任からのアドバイスを学級全体に伝えて、次の練習に役立てるようにした。

また、指揮者とパートリーダーを中心に生徒主

資料4 毎日の評価表(3週目の一部)

	ソプラノ	アルト	テノール	指揮者	先生から
9/24(火)	口の形・姿勢【 】 音程【 】 強弱【 】 緊張していたのが声がいつもより出ていなかった。今度は強弱に気を付けて練習できるといい。	口の形・姿勢【 】 音程【 】 強弱【 】 休み明けだったので声が出ていなかった。	口の形・姿勢【 】 音程【 】 強弱【 】 緊張して声が出なかつたり間違えた。	遠征に行ったら、やっぱり男子の声も大きく、僕たちよりもすごかったです。	2-1で歌っているのを聞きました。声が出てないですね。この2週間、遠征する機会を増やし、人前で歌うことに慣れましょう。

よくできた、もう一息、努力が必要

体で練習を進めていく形をとり、練習の評価もパートリーダーや指揮者がまず行った。担任はきっかけ作りとアドバイスを主とし、練習の評価も生徒の後にいった。

あわせて、2度にわたる学年での発表会や他学年の学級に行つての相互発表など、人前で歌う機会を増やし、場に慣れるとともに、ほかの先生方や上級生から評価してもらうことで、自分たちの課題を意識し、そこに注意して練習に取り組んだ。最後の週の練習計画（朝練習の開始日、他学年との相互発表先）は生徒たちの意見を中心にして立案、実施した。

イ 結果と考察

練習当初、生徒たちの中には「歌うのはきらい、あまり好きではない」「聞く方が好き」「人の前で歌うのは苦手」という意識があった。それでも生徒たちは前向きに受け止め（資料5ア）練習に取り組んだ。毎日の評価表にもやの評価に改善点を挙げたコメントが増えてきた。生活ノートの中にもうまくなってきたことを実感するとともに、課題に気づく内容が見られるようになった（資料5イ）。また、上級生の合唱に触れることで、そのよい点に気づくとともに、自分たちの合唱をそこまで近づけたい、という思いを持つことができたことが分かる（資料5ウ）。

資料6は、合唱コンクール終了後、音楽の授業で行った、生徒の取組の自己評価の内訳である。事前アンケートの段階では、「大変だ」「歌いたくないけどしょうがない」といった、マイナス思考的な考えを書いていた生徒が10名いた。それが、コンクール終了後の取組における自己評価を見ると、Cの評価をした生徒は一人もいなかった。事前にマイナス思考的な考えだった10名も、

4名がA、残り6名もBと評価しており、内2名はアルト、テノールのパートリーダーとして、努力していた。よりよい合唱をつくるために、目当て（評価の観点）を明確にし、他学年との相互発表といった機会（客観的な評価の場）を設定し、評価内容を生徒の口から学級全体に返していった（振り返り）ことが、生徒たちの活動意欲を高めたことが分かる。

このことから、よりよい合唱を目指して努力することができたと考える。

(3)互いのよさを生かして学級が一つになって高め合えたことに気づくことができたか（見通し3）

ア 実践の概要

学級活動「合唱コンクールを終えて」において、まず、「どんな合唱コンクールにできたか」を振り返り、発表した。次に、そのような合唱コンクールにできたのは、「どんなことができたからか」という、練習への取組に際する行動面についてと、「どんな気持ちでやってきたからか」という、意識面について考えた。これらのことを板書で整理した上で合唱コンクールの取組全体を振り返り、合唱コンクールから学んだことと、今後の学級としての取組をまとめて、発表した。

資料5 生徒の前向きな受け止め

ア 9/18 学年中間発表
3組は声小さい。(特に男子)アルトは教室では声が出ているのに、体育館では全然出ていませんでした。3組ファイトだ!!
どのクラスもすごいなと思いました。その反対に3組はいつもより声が出てなくて残念でした。あがってしまう人が多いのかなあ？

イ 上達の実感・新たな課題

前の中間発表のときより、体育館に響いていたのでよかったです。
歌、とってもよかったです。男子があとちょっと出せば大きさは完ぺきだと思う。
体育館での練習は、強弱がまだはっきりしてなくて、気持ちがあまり込められていないと思いました。
2回目の学年合唱がありました。歌った時、あまり緊張はしませんでした。

ウ 遠征での感想

2年1組の人たちはほとんどの人が大きな口を開けて歌っていてすごく上手でした。練習をくり返して、緊張していてもきちんと歌えるように頑張りたいです。2年1組の人が言ってくれたアドバイスもきちんとできるようにしたいです。
やっぱりすごい。1年の声はみんな「ザーツ」ってあらい感じ。でも3年生の声は、なんかまっすぐしてきれいな感じだと思いました。あんな歌が歌えたら...と思いました。

資料6 合唱の取組の自己評価

パートリーダーを中心に、	A	20名
進んで練習に取り組めた。	B	14名
	C	0名

イ 結果と考察

資料7は、生徒たちの発言などを基に図の形でまとめたものである。「どんな合唱コンク

ールにできたか」では、学年優勝という結果もあり、ほとんどの生徒が充実感を持ってたことが分かる。また、取組に際する行動、意識を見ると、「優勝」「いい合唱」を目標に、全員で一生懸命努力してきたからこそ優勝できた、と生徒たちが気づいていることも分かる。また、満足いく合唱コンクールにできた取組とその意識を図示したことで、「みんなが」「ひとつに」という共通点を見つけることができた。そのうえで合唱コンクールの取組全体を振り返らせたことで、「みんなの大切さ」「みんなが力をあわせれば一人よりはるかに大きな力が出せる」というように、合唱の領域にとどまらず、学級の、一人一人が集まった力の大きさに目が向いていることが、「合唱コンクールで学んだこと」を見ていくと分かる。

このことから、互いのよさを生かして学級が一つになって協力した、というよさに気づくことができた、と考える。

研究のまとめと今後の課題

1 研究のまとめ

学級目標を基に自分たちの目指す姿を考え出したことで、具体的な取組の形で集団における自分の役割を知り、行動への意欲を高めることができた。

合唱コンクールへの取組において、週ごとの目当てを明確にしたり、他学年との相互発表を行ったりしたことで、よりよい合唱を目指して学級として努力することができた。

振り返りにおいて、取組における際の意識と自分たちができたことに視点を当て、図示して整理したことで、互いのよさを生かして学級が一つになって協力した、というよさに気づき、互いのよさを生かして高め合えたことを実感させることができた。

2 今後の課題

一人一人の思いを出した中からお互いのよさに気づき、相手のよさを自分のものとして高め合う姿が、日々の生活の中に見られるよう、手だてを工夫していきたい。

生徒たちの学級に対する意識が、今後の学校生活においても様々な言動として表れるよう、学級目標の実現に向けて、より具体的な手だてを考え、学級づくりに努力していきたい。

資料7 合唱コンクールを終えて

